



No.31

Dec.2008

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
<http://www.nabunken.jp/>

※ 完成近づく第一次大極殿

平成10年からおこなわれてきた第一次大極殿の復原工事もいよいよ大詰めとなってまいりました。現状では二重目の組立工事もほぼ終了し、屋根には瓦が葺き上げられ、大棟の両端には金色の鳴尾が据えられています。これら鳴尾や瓦をいかにして復原するかについては、長期間にわたる議論・検討や試作を経てきました。

瓦に関しては、実際の出土資料を元にして、どのような文様の瓦を、どのような寸法で、そしてどのように葺くのか、様々な要素を細部にいたるまで検討することが必要でした。例えば、大極殿の屋根には10万枚もの瓦を葺いていますが、瓦を葺く間隔が2～3 mm異なるだけで、必要とする瓦が千枚単位で変わってきます。

瓦そのものに関しても、可能な限り出土瓦に近づける努力がなされました。今回作られた復原瓦の最大の特徴は、その色調にあります。実際に出土資料を見ますと、大極殿の瓦は他の地点から出土した瓦に比べて、明らかに黒く焼かれていることがわかりました。そこで、理化学的手法によってその「黒さ」を客観的に測定し、様々な試作を重ねながら、出土瓦の「黒さ」に近づけていきました。その結果、復原された大極殿は重厚な雰囲気の屋根をもつことになりました。

鳴尾に関しては、平城宮から出土例がないことから、あらゆる意味で一から復原案を考えなければなりませんでした。材質に関しては、出土例がないことと、文献で西大寺などに金属製の鳴尾の存在が記されていることから、瓦製ではなく金属製にしました。その大きさや寸法については、唐招提寺など古代の鳴尾を参考にしつつ、大極殿の建物の大きさに応じた寸法を採用しました。結果として、高さ2m近い非常に大型の鳴尾となりました。

今後、残されている作業としては、初重の土壁に関する左官工事と、その壁に四神を描く彩色作業があります。そして来年度、1年がかりで長年大極殿を取り巻いてきた素屋根の解体工事がおこなわれます。年間を通じて、徐々に大極殿が姿を現していくのです。

そして遷都1300年を迎える2010年には、完成された大極殿が一般に公開されます。その折には、重厚な屋根に燐然と輝く鳴尾の輝きを、ぜひともご覧にいらしてください。（都城発掘調査部 林 正憲）



燐然と輝く金色の鳴尾